

〈 特 集 〉

マレガ文書の魅力を探る

— マレガ神父・キリシタン統制・村社会 —



# 特集にあたって

## バチカン図書館所蔵切支丹関係文書の魅力を探る

大友 一 雄

本特集は、2017年7月1日、国文学研究資料館を会場に開催された研究集会「バチカン図書館所蔵切支丹関係文書の魅力を探る」での成果、およびポルトガルで開催されたEAJS大会(EAJS2017 Conference in Lisbon)での2017年9月2日のパネル報告の成果を踏まえたものである。

バチカン図書館所蔵切支丹関係文書群をめぐる本紀要での研究報告は、本誌第12号(2016年3月刊行)での特集「キリシタンの跡をたどる—バチカン図書館所蔵マレガ収集文書の発見と国際交流—」に続くものである。

バチカン図書館との共同研究は、2011年、バチカン図書館でマリオ・マレガ神父収集切支丹関係文書1万数千点(以下、マレガ文書群とする)が発見されたことを受け、2013年に人間文化研究機構とバチカン図書館とが調査研究に関する協定を締結したことに始まる。活動は人間文化研究機構の日本関連在外資料調査研究・活用事業の一つとして位置づけられ、国文学研究資料館が統括機関になり、東京大学史料編纂所、大分県立先哲史料館はじめ、内外の機関・研究者が連携して、(1)文書群の概要調査(文書の取上げ、史料番号付与、状態調査など)、(2)文書の保存修復と管理公開体制の整備、(3)文書の全点撮影、(4)画像を利用した文書目録作成、(5)画像データベースのWeb公開、以上を基本的な事業として、バチカン図書館と協働で進めてきた。いずれも文書類の管理・公開では必須な事項であり、アーカイブズ活動の基本である。全体点数が1万数千点に及ぶため、全体的な調査計画書を作成し、年次段階的に実施してきた。

また、これらの事業に関わり保存修復などに関する研究、目録記述に関する研究、マリオ・マレガ研究、切支丹・類族研究などを並行して進めてきた。事業そのものは、まだ道半ばであるが、事業の進捗と確認された事実を、広く伝えることの重要性に鑑み、研究成果の公表を目的に本特集を企画したものである。

特集のもとになった7月1日の研究集会は、全体を2部構成として、第1部では、大友一雄「プロジェクトの進捗とその可能性」がプロジェクトの目的や進捗を、佐藤晃洋「マレガ文書群の概要」が文書群の伝来や文書システムなどとの関わりで文書群の全体像を伝えた。第2部では、文書群を理解するうえでの基本的な研究、いかにすればマレガ文書群の可能性を探るうえでの最も基本的な3つの報告を用意した。本特集は、この3報告をもとに構成したものである。

第1報告、シルヴィオ・ヴィータ「マリオ・マレガ神父のキリシタン研究とその位置付—地元の間学及び大正・昭和のキリシタン像を中心に—」は、文書群を収集したマレガ神父の20世紀前半期の諸活動を分析し、国際的・地域的な動向のなかで神父の存在を位置づけることを試みた。内外の資料を縦横に駆使した報告であり、これまで知られていない神父の日本での諸活動が解明されている。マレガ神父は収集した文書群を相当に整理していたことが明らかにされ

てきており、文書群を理解するうえでも同神父に関する研究が不可欠となっている。また、マレガ文書群には、千点余の神父自身の資料群（収集文書群に関するメモ、刊行史料集原稿など）が含まれる。さらに、ローマ・サレジオ大学図書館にも、マレガ神父の書簡・原稿・写真・和書などが大量に伝来しており、マレガ神父研究は、文書群理解の上でも欠かせない。ヴィータ報告はこの点も意識したものである。

第2報告、三野行徳「白杵藩宗門方役所とキリシタン統制」は、マレガ文書群の大半の出所となる白杵藩宗門方役所と同藩の切支丹統制の仕組みの変遷を、転びキリシタンやその子孫である類族の生存人数なども示しながら検討する。今後、禁教政策を検討するための基本的な情報が提供されたといえる。すでに知られるように「宗門方」の設置は、貞享4年の幕府の指示による。白杵藩では宗門奉行が置かれ宗門人別改、絵踏、類族管理などを担当したが具体的な研究はほとんどなされていない。マレガ文書群は、その大半が宗門奉行の活動に関わり作成・管理・保存されてきたものであり、宗門奉行の組織・機能などの基礎的な研究が欠かせない。それらを通じて適切な歴史研究も可能になるといえる。三野報告は、今後の研究展開を念頭にその具体化を試みたものといえる。

第3報告、大橋幸泰「キリシタン類族改制度と村社会—白杵藩の場合—」は、領主・近隣村人からも厳しい監視の目を向けられたと理解されてきた類族の存在について、地域社会での婚姻関係や養子縁組などの主にライフサイクルのなかでの実態を、地域に残された文書なども利用して丁寧分析され、従来指摘されるような状況が確認できないことを実証した。類族研究に新たな分析視角を提示したものである。マレガ文書群は寛永期から幕末に及び、各時代ともそれぞれ相当の分量であるが、その文書の内容は、とくに中後期の場合、相当数が類族関係の文書であり、他に例がない規模である。大橋論文は、マレガ文書を利用するには不可欠な分析といえる。地域的な差異なども考えられるが、社会の側から捉える類族研究を進める際の基本的な成果である。

三野報告は権力と宗教・信仰の観点から史的展開を論じ、大橋報告は社会認識の観点から類族を捉え直し、ヴィータ報告は、20世紀の宣教師の活動を通じて、切支丹の研究の同時代的特徴を追究した。今後の調査・研究を進めるうえでいずれも欠かせぬ成果といえる。また、3報告はいずれもマレガ文書群のみならず、地域に残される白杵藩関係文書（稲葉家文書）、地域文書（村役人文書など）などの活用を進めている。現在、大分県立先哲史料館（大分県教育庁）、白杵市はじめ関係の市町村との連携を進めつつあるが、それらの成果を反映した点も報告の特徴である。マレガ文書群の大半は、白杵藩の文書であるが、地域には関連の文書（稲葉家文書、藩庁文書群、村役人文書など）が多数残されており、これらの文書との統合的な研究が欠かせない。3報告はこれを先取りした成果となっている。

また、マレガ文書の保存公開に関する基本事業は継続中であり、ここでの成果は、その事業を進めるために欠かせない。多くの方々に共有されることも期待したい。

なお、シンポジウムは、主催人間文化研究機構・国文学研究資料館、共催東京大学史料編纂所・大分県教育委員会（大分県立先哲史料館）・イタリア東方学研究所による。「日本・バチカン国交樹立75年記念」事業として、駐バチカン特命全権大使ジョセフ・チェノットゥ大司教を来賓としてお招きして開催された。記念事業に関わり在バチカン日本国大使館の協力を得た。以上を明示し感謝としたい。